

# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題

研究科・専攻 【仏教学研究科 仏教学専攻 博士後期課程】
試験科目 【専門試験 禅学・仏教学一般】

## 【出題意図】

禅学・宗学と仏教学および宗教学のどの分野においても、大学院博士後期課程に在籍し、研究活動を行う学力を評価するために基本的な事柄を問題とした。

【問題】 次の設問の中から 2 題を選択して解答しなさい。必ず 2 題を選択すること。なお選択した番号を解答の最初に( )で明記すること。

1. 中国初期禅宗について、正統と異端という視点から論述して下さい。

## 【出題の趣旨と評価の基準】

中国禅宗史上の重大な分岐点の一つである、いわゆる「北宗」「南宗」の対立について論述を求める。禅門の伝承として語り伝えられた禅の歴史と、20世紀に敦煌文献を通じて解明された歴史学的な禅宗史、①そのそれぞれについて、原典資料と近年の研究成果を踏まえた正確な理解をもちえているか、②その両者を混淆せず、明確に区別して説明できているか、③系譜争いと思想対立の連動が把握されているか、④この分岐が後世の禅宗に及ぼした影響にも注意が向けられているか、そして、⑤それらの論旨を明晰な日本語の文章で表現できているか、等の観点から評価を行った。

## 【解答例】

禅門の伝承では、西天（インド）の第二十八祖、菩提達摩（達磨）によってインドから伝えられた禅の教えは、中国において、二祖恵可（慧可）、三祖僧璨、四祖道信、五祖弘忍、六祖恵能（慧能）と相承された、と語り伝えられている。

恵能が五祖の法をついで六祖となったことについては、有名な物語がある。誰もが認める五祖門下の首席、神秀が、「身是菩提樹、心如明鏡台、時時勤拭、莫遺惹塵埃」という偈を提示した。それに対し、一文不知の行者であった恵能が、「菩提本無樹、明鏡亦非台、本来無一物、何処惹塵埃」という偈を対置した。五祖はこれを認め、伝法の証の衣を恵能に授けた、という話である。この後、禅宗は恵能の「南宗」と神秀の「北宗」という二つの系統に分かれ、恵能の「南宗」が正統となったとされてきた。この物語は繁簡さまざまに形で諸書に記されているが、最も名高いのは、おそらく『六祖壇経』冒頭の恵能伝であろう。

しかし、20世紀、新出の敦煌文献を通じて解明された禅宗の歴史は、逆であった。唐代の初期、達磨から弘忍にいたる系譜を掲げ、王朝の支持を受けていたのは、実際には神秀らのほうだった。その権威に果敢に挑戦したのが、恵能の弟子を名のる神会であった。神会は、公開の法会を重ねて開き、弘忍の法をついだのは実は恵能であり、その証拠に、達磨以来の伝法の衣は恵能に授けられたのだと主張した。その法会の記録が、敦煌出土の『菩提達摩南宗定是非論』である。神秀らの一門を「北宗」、恵能の法門を「南宗」とする呼称、伝法の衣が達磨から恵能まで代々相承されたとする伝説、また達磨が梁の武帝の功利的な仏教信仰を「無功德」と断じたとする故事、いずれも、後世、禅門の伝承として長く語り伝えられたものだが、もとは、神会がこの運動のなかで一方的に唱えはじめた説であった。

神会の「北宗」批判は、系譜の問題のみに止まらなかった。神会は恵能の「南宗」を、段階をふまない直観的悟りを説く「頓悟」の法門と主張し、神秀らの「北宗」を、漸進的悟りを説く「漸悟」の法門にすぎないと批判した。そこで神会が説いた「頓悟」は、開悟が速いということではなく、自らの本性を自ら見ることには、もともと時間差も過程の前後も存在しない、という意味であった。これは坐禅の枠組みを解体し、日常の営為のなかで本性の自覚を追求するという、その後の唐代禅の思想の端緒を開くものであった。

この後、神会自身の法系は早くに滅びたが、神会の主張した、「北宗」「漸悟」対「南宗」「頓悟」——「南能北秀」「南頓北漸」——という図式は、禅門全体の共通認識としてひろく定着していった。安史の乱前後に競起した禅宗諸派は、この図式を前提としつつ、ある者は恵能より古い起源を主張し、ある者は新たな系譜を創作して自派を「六祖」恵能に結びつけてゆき、やがて馬祖禅の台頭とともに、「六祖恵能—南岳懷讓—馬祖道一」という法系が禅門の新たな正統となっていたのであった。（1218字）

（参考文献：柳田聖山『禅思想』（1975年、中央公論社刊）。小川隆『中国禅宗史』（2020年、筑摩書房刊））

# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題

2. 日本の曹洞宗における一仏両祖について述べ、なぜ二人の宗祖が存在するのかについて解説して下さい。

## 【解答例】

日本曹洞宗（以下、曹洞宗）では、釈迦牟尼仏を本尊とし、高祖承陽大師及び太祖常済大師を両祖とする（「曹洞宗宗憲」第4条）。ここでいう釈迦牟尼仏とは、三身未分の歴史上の釈迦牟尼仏であり、高祖承陽大師とは道元禅師（1200～1253）、太祖常済大師とは瑩山紹瑾禅師（1264〈1268〉～1325）である。

曹洞宗では、道元禅師を高祖と仰ぎ、道元禅師下三世の法孫である瑩山禅師を太祖と仰ぎ、両祖を立てている。それは、曹洞宗の宗旨は道元禅師によって開かれたが、曹洞宗の宗門は瑩山禅師によって開かれたということができることによる。よって道元禅師を「教義の祖」、瑩山禅師を「教団の祖」などとも言う。

道元禅師は、諡号を仏性伝東国師、承陽大師という。13歳（以下、数え年）のとき比叡山にのぼり、翌年得度（出家）し、6年間にわたり天台の教学を修学し、18歳の秋、京都建仁寺を訪ね栄西の高弟明全（1184～1225）のもとに投じ、禅の奥義を学んだ。24歳のとき明全とともに入宋し、中国諸山を歴遊して当代一流の禅師に参じ、ついに天童山の如浄（1162～1227）に出逢い、只管打坐を説く如浄の法を嗣ぎ、28歳で帰朝した。帰朝後、坐禅をひろく一般に勧めるため『普勧坐禅儀』を著し、坐禅を仏道修行の正門とし、只管打坐を説いた。34歳の時、京都深草に興聖寺を開いて坐禅の挙揚をはかったが、比叡山との軋轢と権勢との接触を避け、44歳の時、波多野義重氏の所領であった越前志比庄に移り、大仏寺を開創、後に永平寺と改称した。48歳の時、北条時頼の招請（不詳）により鎌倉に赴くものの翌3月に永平寺に戻り、その後は専ら坐禅を中心とした修行生活を送りながら弟子の養成に尽くした。54歳の時、永平寺を弟子の懐奘（1198～1280）にゆずり、京都高辻西洞院覚念の邸にて病氣療養したが世寿54歳で示寂した。著書に『普勧坐禅儀』『正法眼蔵』『典座教訓』『学道用心集』等がある。

瑩山紹瑾禅師（1264〈1268〉～1325）は、道元禅師下三世（道元—懐奘—義介—瑩山）の祖師であり、諡号を弘徳円明国師、常済大師という。曹洞宗の大本山である總持寺（横浜市鶴見区）の開山である。瑩山禅師は總持寺（現在の能登の祖院）以外にも、加賀国・能登国に数ヶ寺を新たに開創し、瑩山禅師の門流たちによって、曹洞宗は全国へと教線を拡大した。

道元禅師は、自らが中国から伝えた仏法を「正伝の仏法」（「仏伝正伝の大道」）と言い「禅宗」「曹洞宗」ということを嫌い（『正法眼蔵』『仏道』）、宗派名を名乗ることをしなかった。ところで、道元禅師の師、如浄の法系は中国禅の五家七宗の一つ「曹洞宗」の法系であったが、もう一人の師、明全は「臨済宗」の栄西禅師の弟子であり、また、道元禅師の主な弟子達は「達磨宗」から転宗した人であった。いわば初期の道元禅師門下の僧団は宗派名を持たず混沌としていたと思われる。道元禅師下三世の瑩山禅師はこのような状況を危惧し「曹洞宗」と自称するに至ったと考えられる。能登（石川県）永光寺には「五老峰」があるが、開山瑩山禅師が永光寺の奥頭に五禅師（如浄・道元・懐奘・義介・瑩山）の遺品を納め、その前方に開山堂を建立して如浄以下五禅師の尊牌を安置し伝灯院と名づけた。五老峰の建立によって他宗派からの改宗者を含む曹洞宗の初期の師承関係が天童如浄に結びつけられて一元化し、曹洞宗を確立したと考えられている。よって、「正伝の仏法」を中国より伝え、後に成立する日本の「曹洞宗」の基礎を築いたのは道元禅師であるが、日本において「曹洞宗」という宗名を名乗り、「曹洞宗」という宗派を確立したのは瑩山禅師であると考えられており、日本の「曹洞宗」には二人の宗祖が存在することになったと考えられるのである。

（『禅の歴史—曹洞禅の源流を尋ねて—』第5章「日本の曹洞禅」〔2022年、駒澤大学禅ブランディング事業事務局〕）

# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題

3. 如来蔵思想について、その形成過程と展開に留意して知るところを述べて下さい。

## 【解答例】

「如来蔵」の原語は「タターガタ（如来）」と「ガルバ（母胎・胎児・胤）よりなる合成語「タターガタ・ガルバ」で、この語の初出は「一切衆生は如来蔵を有している」と説く『如来蔵経』である。如来蔵思想はこの経に基づくとされる。一方、『大乘涅槃経』（以下、『涅槃経』と略す）に「一切衆生悉有仏性」の語のあることは有名であり、「如来蔵」と「仏性」には若干の原語的意味の相違はあるものの、何れも「仏の本性」という基本的内容を持つところから「如来蔵思想」と「仏性思想」は同致のものともみなされ、「如来蔵・仏性思想」と呼称されることも多い。

インドでは中観派や瑜伽行派とは異なって、如来蔵思想に基づく第三の学派は形成されなかったが、『涅槃経』が広く流布した東アジア仏教圏では「如来蔵・仏性思想」は主要な思想潮流となった。事実、わが国の仏教諸宗派のほとんどはその教理を受け入れていると言っても過言ではない。

さて、如来蔵思想の形成過程ということになれば、いまから約半世紀前に著された高崎直道博士の『如来蔵思想の形成』（春秋社、1974年）を逸することはできない。如来蔵思想をはじめて体系的に論じた書が『究竟一乗宝性論』であることは周知のとおりであるが、高崎博士は『宝性論』に引用されていない経典を含め、多岐わたる経論を精査し、『宝性論』において体系化される「如来蔵・仏性思想」の形成過程を詳細に論じられ、その結果を「如来蔵系経論図」として示された。同書において高崎博士は、如来蔵思想の淵源が阿含経（初期経典）や般若経の「自性清浄心」、『法華経』の一乗思想、または『華嚴経』の無尽法界の思想等に認められ、『如来蔵経』に至って「如来蔵」の語がはじめて使用され、同経によって如来蔵思想がインド仏教において明確に説かれるようになったと明かされた。さらに博士は『如来蔵経』の経説を受けて、次の二系統の経典が作成されることになったと指摘した。

①『如来蔵経』→『不増不減経』→『勝鬘経』

②『如来蔵経』→『涅槃経』→『大法鼓経』→『央掘魔羅経』→『大薩遮尼乾子経』

(②はいずれも『涅槃経』が創始した「仏性」の語を使用して如来蔵説を説いている。)

高崎博士は特に①を如来蔵思想を説く直系と位置づけ、「如来蔵系統の三部経」と呼んでいる。ところで近時、ラディッチ教授は『如来蔵経』と『涅槃経』の先後関係の見直しを主張し、「仏性」を説いた『涅槃経』こそが如来蔵思想の正系であると言っている。ラディッチ教授の説は、『如来蔵経』の成立過程を明かし「如来蔵」の語義に対して修正を迫ったツインマーマン教授の主張とともに注目されるものと言えよう。

ところで、仏教の基本は「無我」にあり、「如来常住」や「悉有仏性」と言う実有的側面を強調する如来蔵思想は「仏教にあらざ」と主張したのが松本史朗氏であった。従来、如来蔵・仏性思想は平等思想を説くものとされてきたが、松本氏はそれは見せかけに過ぎず、実際には差別思想を用意するものだとして厳しくこれを指弾し、学界に大きな衝撃を与えた。しかし、この問題はいまなお決着を見ていない。

如来蔵思想が仏と衆生の等質性を高らかに説いたことは疑いなく、その教えは修行を促す目的で説かれたものであった。しかし、現実には煩悩にまみれた衆生が存在し、その煩悩が何に由来し、どうすれば除去できるのか、という点については如来蔵系経論では十分な説明がなされているとは言い難く、そうした問題に対する考察は主としてのちの唯識系論書に委ねられることになった。如来蔵思想が学派の系統としては主に瑜伽行派の人びとの手に属することになったのはゆえなきことではないであろう。

# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題

4. 「偽経（疑経）」について、その定義と仏教史上における意義を述べて下さい。

## 【出題の趣旨と評価の基準】

近時、中国仏教研究において重要視されている「偽経（疑経）」について、その定義および仏教史・研究上の意義について近年の研究成果を踏まえた正確な理解を持っているか否かの確認。「評価の基準」としては、論述内容とともにわかりやすい論旨、文章表現になっているかについても留意した。なお、以下はあくまで一つの「解答例」であり、個々の経典を取り上げて論述している場合も採点の対象とした。

## 【解答例】

経典を釈尊の直説、金口の説法を建前とするならば、中国で撰述された経典はあり得ないということになる。「偽経（疑経）」とはそうした立場から漢訳仏教圏、主として中国仏教において用いられた言葉である。

中国最初の経録（経典目録）として知られる『綜理衆教目録』において（同目録は現存しないが僧祐の『出三蔵記集』によってその内容を知ることができる）、釈道安は「疑経」としてその正当性が疑わしい経典を摘出し、『開元釈教録』を著した唐の智昇は「偽経」とは邪見によって造られたものであって「真経」を乱すものであるといている。これらからすると、「偽経（疑経）」とはインド伝来の翻訳経典を「真経」とするのに対し、翻訳経典とは見なしがたい経を呼んだものと推察される。「疑経」「偽経」のほかに「疑偽経」の用例もあるが、一般にはこれらの語はほぼ同義に用いられることが多い。現代にあっては、「疑」「偽」という文字から受ける負のイメージを嫌ってか上記の経を「中国撰述経典」と呼称する学者もいる。また最近では「経典になぞらえて作成された文献」という意味で「擬経」とする研究者もいる。

ところで、経典を釈尊の直説、金口の説法と規定するならば、インド撰述ではあっても釈尊が入滅してから何百年も経ってから作成された大乘経典も「偽経」ということになり、事実そう呼ぶ学者もいるが、大乘仏典は「仏教を思想的に深め、高めた点で、絶大な価値を有している」と見て「仏説」として扱うのが現在の学界では主流である。

さて、釈道安が『綜理衆教目録』において、早くもその正当性が疑わしい経典を摘出しているところからすると、「偽経（疑経）」の作成は仏教が中国に本格的に伝来してまもなく開始されたことが伺われる。道安以後、彼に続く経録作成者はその摘出と排除に努めたが、その努力をあざ笑うかのように「偽経（疑経）」は長く中国仏教史上において増加の一途をたどっていった。それだけ多くの「偽経（疑経）」が作られたということは、必然的にそこには中国仏教者の仏教への対応の諸相が示されているということであり、その点に仏教史のおよび研究の意義が認められよう。

前述のように経録作成者から厳しく排斥され続けられた「偽経（疑経）」は、当然のことながらいくつかの例外を除いて一切経に入蔵されることはなく、その多くは経録に名をとどめるだけで散逸してしまっていたが、20世紀の初頭に敦煌石窟から発見されたいわゆる敦煌文書の中に多くの「偽経（疑経）」が含まれていることが判明し、大きく研究が進展することとなった。その代表的成果が牧田諦亮博士の『疑経研究』（京都大学人文科学研究所、1976年）であり、また近時は名古屋市七寺から発見された古逸文献を利用した研究も進んでいる。

代表的「偽経（疑経）」としては、『浄土三昧経』『提謂波利経』『仁王般若経』『梵網経』『菩薩瓔珞本業経』『像法決疑経』『父母恩重経』『清浄法行経』『観世音三昧経』『仏説延寿命経』『円覚経』『楞嚴経』等があり、以上の経典名を見れば自ずと中国仏教史上における「偽経（疑経）」の意義および研究の重要性が理解されるであろう。

# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題

---

5. 宗教進化論とは何かを説明した上で、その問題点についてどのような学問的な議論があるのかを述べて下さい。

---

## 【出題意図】

宗教進化論をめぐる議論について出題することで、キリスト教中心主義的な偏りのある問題点や宗教概念をめぐる議論に関する理解を問い、宗教学に関する研究を行う上で必要不可欠な学問的見識を確認するため

---

## 【解答例】

宗教進化論とは、宗教の起源をめぐる宗教学や文化人類学の学問的議論である。

---

文化人類学者のエドワード・タイラーは宗教の起源としてアニミズム（精霊崇拜）を主張し、マレットはさらにアニミズムの前段階としてマナイズム（呪力崇拜）を主張した。こうした起源論と多神教、一神教という宗教の類型論が組み合わされて、マナイズムからアニミズム、アニミズムから多神教、そして最終的に一神教へと「進化」という図式で宗教「発展形態」を描いたのが宗教進化論である。ただし一神教が「発展」したものみなす枠組みは多神教などよりも一神教の方が優れているという価値基準を内包するものであり、とくにキリスト教を中心とする偏った学問的概念となっている問題点がある。こうした学問概念や研究枠組みがもつ西洋優位の方向性は、サイードのオリエンタリズム批判に代表される宗教言説批判ともつながっている。

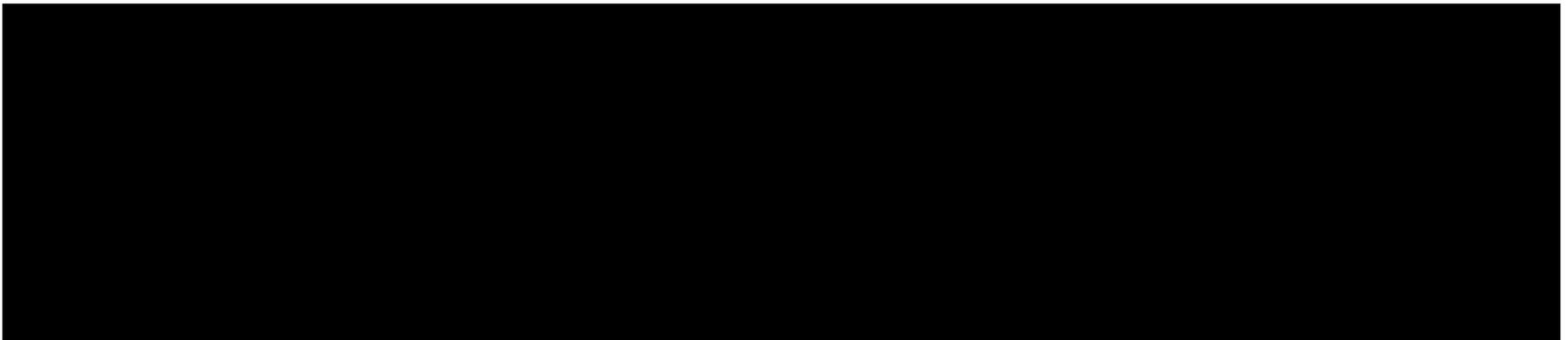
# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

研究科・専攻 【 仏教学研究科 仏教学専攻 博士後期課程 】
試験科目 【 外国語試験 英語 】

## 【出題意図】

- 1)文章の理解，とりわけ構文の理解を確認すること。具体的には、広く知られている「ブッダの最後の食事」に関して述べた英文を利用して、英文の読解力を確認すること
- 2)どれだけわかり易い日本語に訳されているか，すなわち日本語の能力を確認すること

下記の英文は，ブッダの最後の食事について述べたものです。和訳して下さい。



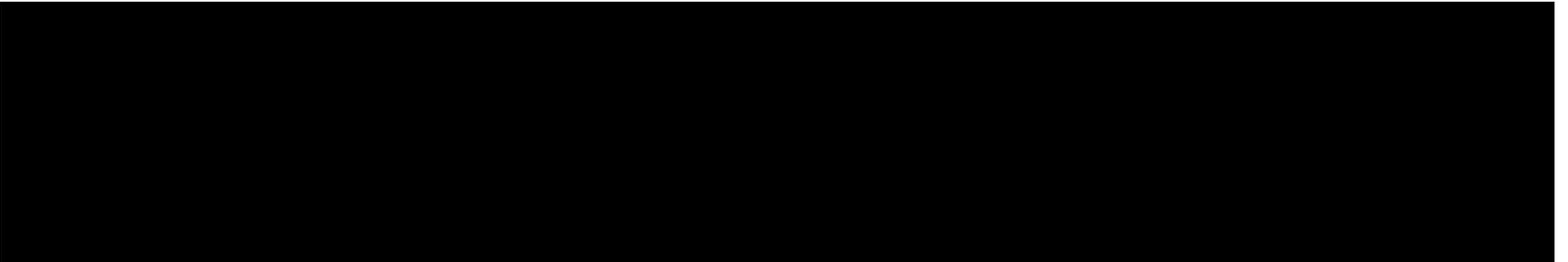
(R. Gordon Wasson: "The Last meal of the Buddha," *Journal of the American Oriental Society*, 102.4, 1982, p.593)

Kushinārā: クシナーラー (地名)      Pāvā: パーヴァー (地名)      Cunda: チュンダ (人名)      metal worker: 金属細工師

śūdra: シュードラ      recension: 校訂本      Mahāparinirvāṇa: 大槃涅槃すなちブッダの入滅のこと

varṇa: ヴァルナ；一般に「カースト」と理解されているもので、バラモン・クシャトリヤ・ヴァイシャ・シュードラの四つのヴァルナのうちのひとつ

## 【訳】



# 2026年度 駒澤大学大学院 2月 入学試験問題及び解答例

研究科・専攻 【 仏教学研究科 仏教学専攻 博士後期課程 】
試験科目 【 専門試験 漢文（仏典・禅籍） 】

## 【出題意図】

受験者の仏教に対する理解度、ならびに仏典、禅籍に対する読解力をはかることを意図するものである。

以下の問1～3のうち、採点を希望する2問に例の通りチェックを入れ、解答しなさい。

例  問1 … \* 3問とも選択した場合は全解答無効

□問1 爾時世尊告舍利弗。「汝已慙懃三請，豈得不説。汝今諦聽，善思念之。吾當爲汝分別解説」。説此語時，會中有比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等，即從座起，禮佛而退。所以者何，此輩罪根深重及増上慢。未得謂得，未證謂證。有如此失，是以不住。世尊默然而不制止。

（『妙法蓮華經』卷一・方便品第二）

（1）全文を現代日本語に訳しなさい。

模範解答：その時に世尊は舍利弗に告げられた。「汝はすでにくりかえし三たびにわたって（説法を）請うたので、どうして説かずにおられよう。汝よ今つまびらかに開き、よく思惟し心に念え。私は汝のためにことわけにし、解説しよう」と。（仏が）この言葉を説かれた時、その会座の中にいた、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷たち5千人が、すぐさまその座を起って、仏に礼拝して退出した。なぜならば、これらの輩は罪の根が重いばかりでなく、思い上がっていた。いまだ得ていないものを得たと思ひこみ、いまだ悟っていないものを悟ったと思っていたのである。このような過失があり、（この座に）とどまらなかったのである。世尊は沈黙をまもって、彼らを制止しなかった。

（2）文中下線部の書き下し文を記しなさい。

汝已に慙懃に三たび請うに、豈に説かざることを得んや。

□問2 什未終日，少覺四大不愈，…與衆僧告別曰，「…願凡所宣譯，傳流後世，咸共弘通。今於衆前發誠實誓，若所傳無謬者，當使焚身之後，舌不焦爛」。以偽秦弘始十一年八月二十日卒于長安，是歲晉義熙五年也。…即於逍遙園，依外國法，以火焚屍，薪滅形碎，唯舌不灰。

（『高僧伝』卷二・鳩摩羅什伝）

\* 「終日」：亡くなる日。「四大不愈」：身体の不調。「焦爛」：焼けただれること。「偽秦」：後秦のこと。「晉」：東晋。「逍遙園」：鳩摩羅什の訳場のあった庭園。

全文を現代日本語に訳しなさい。

模範解答：鳩摩羅什は亡くなる前、いささか体内の不調を覚え、…僧たちに別れを告げて言った。「…願わくは翻訳したもののすべてを後世に流伝させ、みんなして弘通させてほしいものだ。今、大衆の面前で誠心誠意誓いを立てる、もし伝えたものに誤りがなかったならば、きっと荼毘に付した後に、舌が焼けただれることはないであろう」と。後秦の弘始十一年八月二十日に長安にて亡くなった。この歳は東晋の義熙五年に当たる。…ただちに逍遙園において、外国のやり方に従って屍を荼毘に付したところ、薪は燃え尽き肉体はばらばらに砕かれたが、舌だけは灰にならなかった。

□問3 聲聞聞見佛性，菩薩眼見佛性，了達無二，名平等性。性無有異，用則不同。在迷為識，在悟為智。順理為悟，順事為迷。迷即迷自家本心，悟即悟自家本性。一悟永悟，不復更迷。如日出時，不合於暗。智慧日出，不與煩惱暗俱。（『馬祖道一禪師広録』・四家語録卷一）

全文を現代日本語に訳しなさい。

模範解答：声聞は仏性を耳で聞き知り、菩薩は仏性を目で見て取る。無二の理を達観すれば、平等性と名付けるのである。本質は異ならないが、働きは同じではない。迷っている時には識となり、悟れば智慧となる。真理にしたがうのが悟りであり、事象にしたがうのが迷いである。迷うとは自らの本心を迷（みうしな）うことであり、悟るとは自らの本質を悟ることである。一度悟れば永遠に悟り、再び迷うことはない。日が出ればその光は暗（やみ）と合体することがないように、智慧の日が出れば、その輝きは煩惱の暗（やみ）と共存することはない。